

# 令和7年度日高山脈襟裳十勝国立公園協議会

## 第1回登山道部会

日時：令和7年6月23日（月）15:00～16:30

場所：中札内村 農村環境改善センター 大集会室

### 次 第

#### 1. 開 会

#### 2. 議 事

（1） 日高山脈襟裳十勝国立公園登山道部会の今後の進め方について

- ・今後の部会全般の進め方について
- ・グレーディングの試行についての振り返りと、今後の方向性
- ・グレーディングの取組の事例紹介＜愛甲先生＞

（2） 各構成員からの登山道状況に係る情報の持ち寄りについて

（3） 環境省業務の予定について【報告】

（4） その他各構成員からの情報提供【報告】

#### 3. その他の

#### 4. 閉 会

## 【配付資料】

### 構成員・出席者名簿

資料1 日高山脈襟裳十勝国立公園協議会登山道部会の今後の進め方について

資料1(参考) 登山道利用状況把握調査票【令和7年度初回報告】【非公開】

資料2 グレーディングの試行についての振り返りと、今後の方向性

資料3 グレーディングの取組の事例紹介<愛甲教授>

資料3(参考1)ROS～新たな自然公園管理に向けて～(山岳レクリエーション管理研究会)

資料3(参考2)大雪山国立公園登山者のみなさまへ(大雪山グレード)

資料3(参考3)大雪山国立公園愛別岳滑落事故に関する訴訟の判決について

(雑誌「国立公園」より抜粋)【非公開】

資料4 各構成員からの登山道状況に係る情報の持ち寄りについて

報告資料1 環境省業務の予定について

報告資料2 その他各構成員からの情報提供

(1) 登山道に通じる国有林林道の通行状況ほか

(日高北部・南部・十勝西部森林管理署)

(2) 十勝西部森林管理署管内の主要山岳及び林道状況(十勝西部森林管理署)

令和7年度日高山脈襟裳十勝国立公園協議会第1回登山道部会  
出席者名簿

分野	所属名	役職名	構成員名(敬称略)	WEB
国	日高北部森林管理署	署長	野木 宏祐	
	日高南部森林管理署	総括事務管理官	大水 貴博	
	十勝西部森林管理署	総括事務管理官	水谷 豊	
	北海道運輸局	観光企画係長	経田 直哉	○
	北海道地方環境事務所	国立公園課長	尼子 直輝	
北海道	環境生活部	自然環境局自然環境課 公園利用係長	今 哲也	○
		自然環境局自然環境課 公園保全係長	藤田 竜太	○
	日高振興局	環境生活課長	栗林 稔	○
	十勝総合振興局	環境生活課長	内田 朋宏	
市町村	帯広市	都市環境部環境室 環境課長	西島 新一	
	日高町	地域経済課長	小野寺 孝	
	平取町	観光商工課長	藤谷 直樹	○
	新冠町	企画課 総括主幹	下川 広司	○
	浦河町	商工観光課長	民部 宏治	○
	様似町	商工観光課長	板谷 潤	
	えりも町	産業振興課長	武田 健太郎	○
	新ひだか町	まちづくり推進課係長	酒井 亮次	○
	清水町	農林課長	寺岡 治彦	
	芽室町	環境土木課 生活環境係長	速水 洋之	
	中札内村	産業課長	尾野 悟里	
	広尾町	水産商工観光課長	室谷 直宏	
登山関係団体	日高山脈連盟	会長	藤田 博己	○
	十勝山脈連盟	会長	齊藤 邦明	
自然保護団体	アポイ岳ファンクラブ	会長	田中 正人	
	十勝自然保護協会	事務局長	川内 和博	
観光関係団体	十勝観光連盟	専務理事	植松 秀訓	
学識経験者	北海道大学大学院	教授	愛甲 哲也	

【随行者】

分野	所属名	役職名	構成員名(敬称略)	WEB
国	日高北部森林管理署	総括事務管理官	長崎 隆憲	○
		事務管理官	伊藤 智哉	
	日高南部森林管理署	主任事務管理官	日野 道俊	
		事務管理官	阿部 達矢	
北海道	日高振興局	環境生活課 自然環境係長	林 正敏	○
		地域創生部主幹	須川 一規	○
		森林室管理係長	林 直樹	○
		環境生活課主任	山内 雄大	
	帯広市	環境課係長	関井 かおる	○
市町村	日高町	地域経済課 総括主幹	高橋 健	
	平取町	観光商工課主事	石井 雄吾	○
	様似町	商工観光課係長	佐々木 将貢	
	えりも町	産業振興課 商工観光係長	伊吹 達也	○
	芽室町	環境土木課 生活環境主査	久保田 伸也	
	中札内村	産業課主事補	工藤 翔太	
	登山関係団体	十勝山岳連盟	副会長	渡邊 達生

【事務局】

北海道地方環境事務所	国立公園課課長補佐	田畠 桂
	国立公園課課長補佐	相原 百合
帯広自然保護官事務所	上席自然保護官	柳田 邦玲雄
	自然保護官補佐	谷水 亨
新ひだか自然保護官事務所	自然保護官	草留 大岳
アジア航測株式会社		中山 里美
		木本 朝美
		高田 雄介
		上山 沙恵子

## 議事1.

### 日高山脈襟裳十勝国立公園登山道部会の今後の進め方について

- 今後の部会全般の進め方について **本資料**
- グレーディングの試行についての振り返りと、今後の方向性
- グレーディングの取組の事例紹介<愛甲先生より>

# 前提となる考え方

部会において作業していく事項として、以下が考えられる。ただし、論点を整理し、合意形成を丁寧に実施することが必要。

まずは、関係者で協力して現状把握・情報共有からはじめていく。

## 作業内容

### ○ 噫緊の対応が必要なもの、すぐにできること

- 登山道に関する現状把握の開始
- 噫緊に提供が必要な情報の整理、発信  
(入山心得、マナー、登山利用の目安 (暫定グレード) )

### ○ 丁寧な検討や長期・段階的な措置が必要なもの

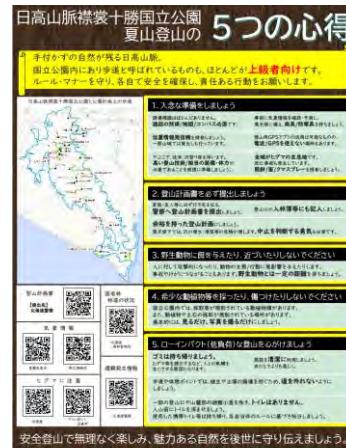
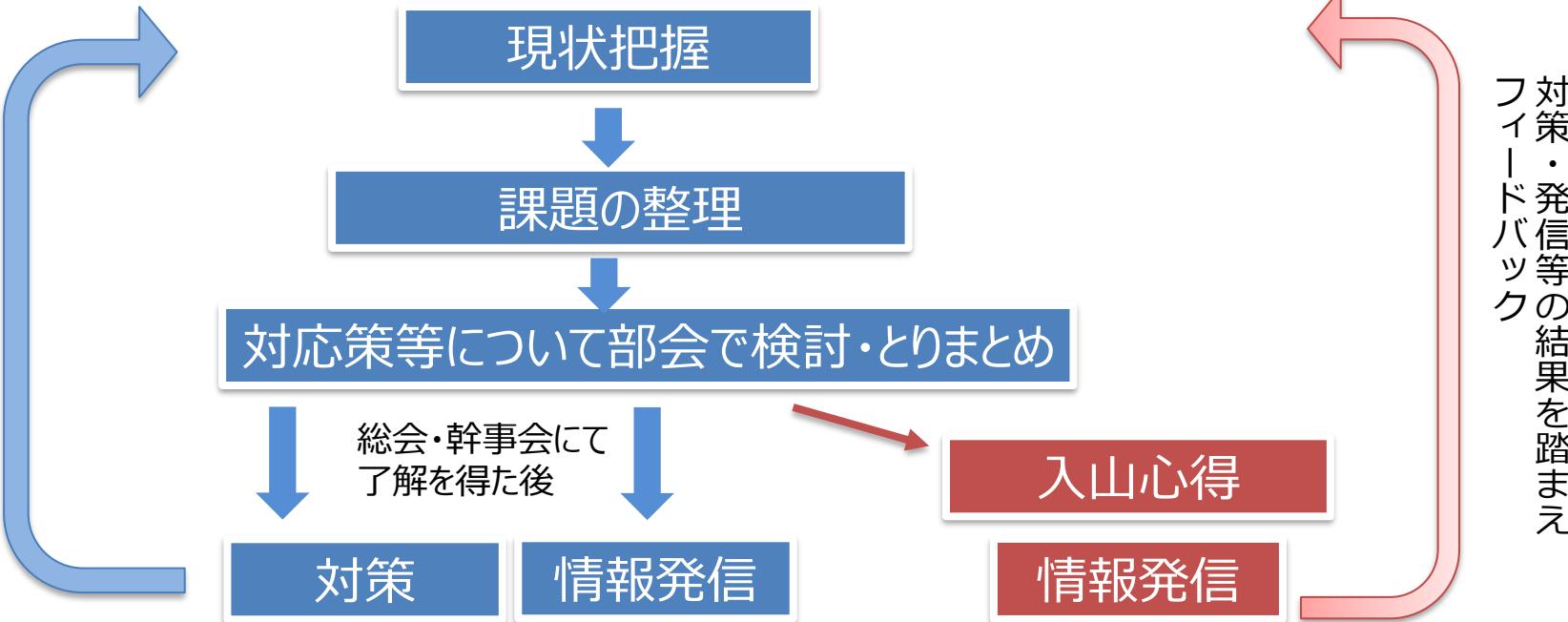
- 登山道に関する現状把握 (モニタリング)
- 登山利用にかかる心得、マナーの検討 (トイレなど)
- 登山道管理にかかる整理・役割分担
- 登山利用の目安、登山管理水準 (グレード) の設定・見直し

等

# 開始した取組

令和7年度夏山シーズンまでに周知が必要な情報を発信する。

対策・発信等の結果を踏まえ  
フィードバック



⇒ 林道が開く5月初旬  
から周知・啓発を開始した。

令和6年度日高山脈襟裳十勝国立公園協議会登山適正利用普及部会（仮称）  
第2回準備会合（令和6年12月20日）資料を改変

# 現状把握・情報共有について

## 1 現状把握

- 国、道、市町村、山岳会、避難小屋管理者等における位置づけ、管理の状況、その他把握している情報を集約・整理し、今後の検討に供する。

## 2 継続的な状況把握・情報共有

- **各者が把握した情報を、継続的に発信・共有する仕組み**（例えば、メーリングリスト等）を検討。
- また、作成作業の省力化及び情報の整理・統合を容易とし、状況把握やそれを踏まえた対応策の検討に活用可能となるよう、**報告フォーマット等の作成**を検討する。

# スケジュール

## 協議会総会（書面審議）（4月23日～30日）

- 部会規約（案）について審議、設置を決定。
- 喫緊に周知が必要な情報（5つの心得）について周知内容の決定。

## ▶ 決定した内容について、各機関・団体が有する各種媒体を用いて発信

### 第1回部会（6月23日）

本日

- 今年の夏山シーズンの状況について、各部会員の活動を通して把握に努めることを確認（資料4）。
- グレードの検討の方向性について議論（資料2）。
- 事務局において、必要に応じて個別ヒアリング。

### 第2回部会（9～11月頃）

- 今年の夏山シーズンの状況について各部会員から報告・共有。  
課題があれば必要な対策について議論。
- 引き続き、グレードの検討について議論。

## グレーディングの試行についての振り返りと、今後の方向性

### ◆ グレード設定の基本的考え方

どのような利用者にどのような体験をしてもらいたいか、その体験を得るために利用者に求められる行動判断は何かという視点に立って、利用体験ランクを設定する。

特に、登山者が登山利用をするに当たって行動判断する目安として整理する。

登山道の管理水準、整備方針などについては、土地所有者や管理者等との丁寧な合意形成が必要となるため、まずは念頭に置かずに検討するものとし、別途調整を図ることとする。

### ◆ グレードの段階

近隣である大雪山国立公園の大雪山グレード(5段階)を参考にしつつも、その枠に囚われず、日高山脈の特性に応じたものとして、一から検討する。一から検討した結果、大雪山グレードに近いものになる可能性も排除しない。

### ◆ 対象とする路線

- ・ 日高山脈襟裳十勝国立公園の公園計画に位置付けられている道路(歩道)事業(バリエーションルート等は含まない)。
- ・ 積雪期(冬期)の利用は想定しない。

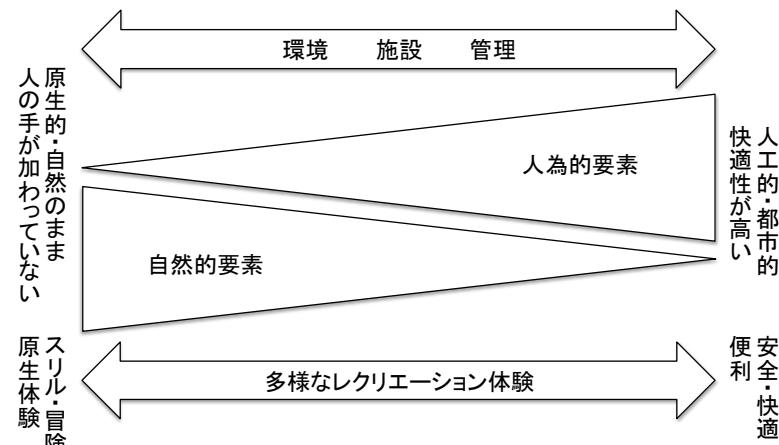
### ◆ 今後の方向性(事務局案)

登山道部会において議論する「グレードのたたき台」を作成するために、学識経験者、対象路線を広く歩いている者及び事務局を中心に、今夏に5名程度によるワーキンググループ(WG)を設置し、今年度中に複数回のWGを開催して、「たたき台」の検討を進めることとしたい。

# 登山道の保全と管理のための 計画策定

## 北海道大学大学院農学研究院・教授 愛甲哲也

## ROSの考え方



(八卷 2008)

## 日高山脈襟裳十勝国立公園の登山道

- ・上級登山者を想定し、案内・注意標識も限定的で、山中にトイレはなく、自己責任での利用が前提
  - ・公園計画18路線中、3路線が探勝歩道（様似、猿留、北海道自然歩道）
  - ・上級コースが多く、尾根の取り付きに沢登り。アプローチの長さ。
  - ・避難小屋、トイレは登山口や取り付き点に。自治体と山岳会が管理。
  - ・死亡／負傷事故の発生
  - ・公園区域外の歩道、避難小屋、トイレ



# 妙高連峰登山道保全管理運営計画



推奨する登山者レベル	そのルートでの体験の質	保全整備レベル	維持管理レベル	情報発信レベル (利用指導や判断も含む)
登山者レベル I 【一般登山者】 …環境も問題なく通過できる身体能力レベル ※日帰り可能、百名山メインルートを想定	妙高連峰の自然を体感できる登山ルート	■自然環境に配慮し、利用の安全性を求める登山者	■登山シーズン前とシーズン中の定期的な巡視点検と運営的な対応(草刈り・枝木整理・立入禁止のロープ張り・施設や設備整備) -木道や木階段等の利用許可を適切に実施 -安心して歩くために必要な標識類を整備	■定期的に情報を発信 -密度の高い管理によって、利用者が迷わず歩ける状態を維持する -定期的(登山シーズン前、シーズン中、自然災害日後+α)な巡視・点検・観察が適切に運営や施設修繕等を実施 -草刈りや木の枝の落とし等の状況に応じて、草刈り(ブランド推奨のために登山者に前に必ず実施)
登山者レベル II 【一般登山者より少し上級者】 …ルートⅠ+地図読める、+α体力で走れる、テントを持参し登山できる	妙高連峰の自然の真ん中を体験できる登山ルート	■自然環境に配慮し、当該レベルの登山者が利用するために最低限必要な整備	■登山シーズン前とシーズン中には巡視点検と対応(草刈り・枝木整理・立入禁止のロープ張り・施設や設備整備) -近自然工法での整備を基本とする(資材が運搬できない場合は切土削除も可) -ロープや輪等の設置は最も弱目 -布道カット等の保護整備は可 -分かれ道には標識を整備	■登山シーズン前までは1回以上の情報を発信 -安全登山や春前準備に必要な登山道情報を適宜発信する -妙高連峰経由等を楽しめる情報を発信する -登山者足下が陥れやすい状況を維持した草刈り
登山者レベル III 【上級登山者】 …ルートⅡ+ある程度の難済・渡渉でも問題なく通過できるレベル	人工的な整備がされているない自然のままの登山ルート	■利用者のための整備は実施しない、自然環境保護のため必要な保全整備は実施	■年1回以上の巡視点検(必要な最小限の維持管理) -ロープや輪等の設置は最も弱目 -年1回程度の巡視点検 -必要な点に応じて草刈り	■年1回以上の情報を発信 -なるべく最新の登山道情報を発信する -年1回程度の巡視点検 -必要な点に応じて草刈り
渡渉	-	上記の整備や維持管理が十分できた上で、さらに人との目的的に余力があり、利用させたい場合は、想定する利用者レベルを本会員までして定期利用を検討することができる。	複数	複数(行政では管理していない)であることを周知

表 礼文島自然歩道における難易度の考え方とコース・利用区間ごとの難易度

難易度			コース・利用区間
易	★	歩行距離2km程度 または 所要時間2時間以内	・桃岩展望台コース(桃岩登山口・レンジャー・ハウス～桃岩展望台[往復]) ・礼文林道コース(礼文林道元地口～ウスユキソウ群生地[往復]) ・岬めぐりコース(江戸屋山道[片道]) ・久種湖畔コース(キャンプ場～ミズバショウ駐車場[片道])
	★★	歩行距離5km程度 または 所要時間3時間程度	・桃岩展望台コース(桃岩登山口・レンジャー・ハウス～キンバイの谷[往復]) ・桃岩展望台コース(桃岩登山口・レンジャー・ハウス～知床[片道]) ・桃岩展望台コース(香深港フェリーターミナル～桃岩展望台[片道]) ・久種湖畔コース(キャンプ場～ミズバショウ駐車場～キャンプ場[片道])
	★★★	歩行距離8km程度 または 所要時間4時間程度	・礼文林道コース(礼文林道元地口～香深井[片道]) ・岬めぐりコース(スコトン岬～西上泊・澄海岬[片道]) ・8時間コース(香深井～宇遠内[往復])
	★★★★	歩行距離10km程度 または 所要時間5時間程度	・岬めぐりコース(スコトン岬～浜中[片道]) ・礼文岳コース(内路～礼文岳山頂[往復]) ・礼文滝コース(礼文林道元地口～礼文滝[往復])
難	★★★★★	歩行距離15km以上 または 所要時間7時間以上	・8時間コース(浜中～宇遠内～香深井[片道])

## 幌尻岳管理水準（案）日高山脈ファンクラブ



ゾーン 整備の水準	ゾーン1 整備区域	ゾーン2 準整備区域	ゾーン3 自然区域	ゾーン4 準保全区域	ゾーン5 保全区域	ゾーン6 原生区域
想定される利用者 日帰り観光客	ハイカー・自然爱好者の初心者	自然爱好者	初級の登山者	中級の登山者	上級の登山者	
歩道 舗装	砂利、石敷、締まった土	土・歩行に支障がない	根・石・ぬかるみ等で気をつけて歩く必要有	岩地、ガレ地、なだらかな沢含む	沢、岩壁	
注意標識 各入口設置 危険な箇所すべてに設置	主要入口設置 危険な箇所すべてに設置	主要入口設置 危険な箇所すべてに設置	特に危険な箇所に設置	設置しない		
トイレ 男女別水洗、常設、ユニバーサルデザイン	必要に応じて男女別水洗が汲み取り	汲み取り、貯留式、必要に応じてバイオトイレ	携帯トイレマーク、必要に応じて携帯トイレブース	必要に応じて携帯トイレ	設置しない	
整備 毎年整備	毎年整備	毎年整備	数年おきで整備	必要に応じて整備	整備されていない	
安全対策 不定期の巡視	不定期の巡視	不定期の巡視	自己責任	自己責任	自己責任	

※案内標識、トイレ、野生動物との出会い、活動プログラム、情報提供についての省略

## 現況の評価結果

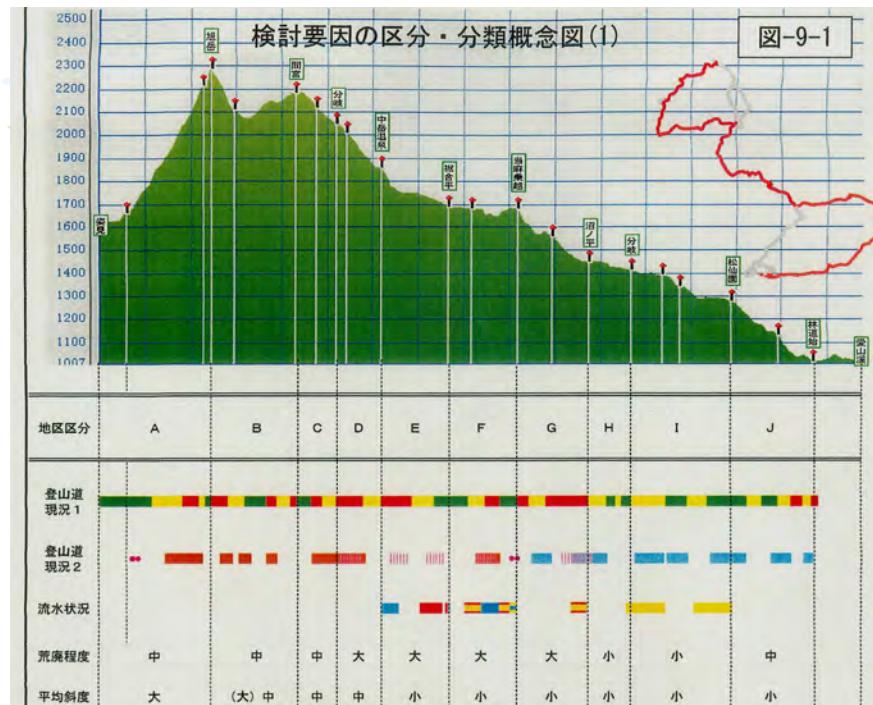
評価 指標	歩道の区域区分											
	登山口仮ゲート～北電車止め	北電車止め～取水ダム	取水ダム～四の沢	四の沢～幌尻山荘	幌尻山荘～馬の背高台	馬の背高台～新冠ルート分岐	新冠ルート分岐～ボロシリ山頂	ボロシリ山頂～七つ沼分岐	七つ沼分岐～トッタベツ山頂	トッタベツ山頂～山荘下降点分歧	山荘下降点分歧～六の沢出合	七つ沼カール
①自然しさ	3	5	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
②歩道	0	3	6	5	5	5	5	5	5	5	5	6
③橋	1	2	6	5	5	5	5	5	5	5	5	6
④道しるべ	4	4	5	6	5	5	5	5	5	4	5	6
⑤人との出会い	4	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6
⑥整備	3	3	3	6	3	3	3	6	6	6	6	6
単純合計	15	22	31	35	29	29	29	33	33	32	33	36
単純平均	2.5	3.7	5.2	5.8	4.8	4.8	4.8	5.5	5.5	5.3	5.5	6.0

## るべき姿の提案例

### 歩道名 峠尻岳ヌカビラルート（仮ゲート→峠尻山荘→峠尻岳）

評価指標	歩道の区域区分											
	登山口仮ゲート～北電車止め	北電車止め～取水ダム	取水ダム～四の沢	四の沢～峠尻山荘	峠尻山荘～馬の背高台	馬の背高台～新冠ルート分歧	新冠ルート分歧～ボロシリ山頂	ボロシリ山頂～七つ沼分岐	七つ沼分岐～トッタベツ山頂	トッタベツ山頂～山莊下降点分歧	山莊下降点分歧～六の沢出合	六の沢出合～七つ沼カール
整備水準による区分	4	4	5	6	5	5	5	5	5	5	6	5

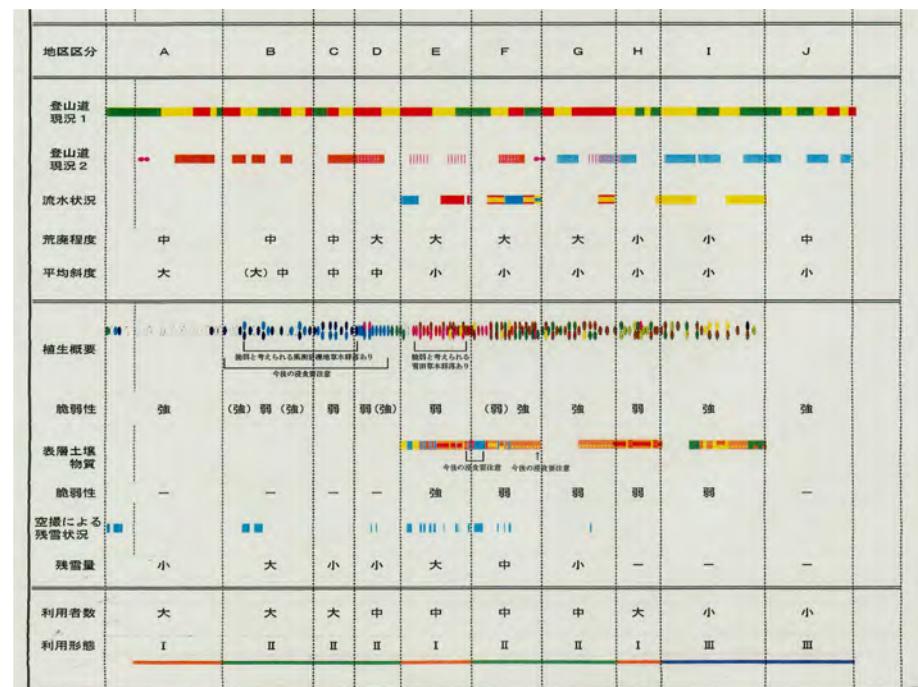
特記事項		増水時の渡渉	増水時の渡渉									クマを考慮すると区分は6
------	--	--------	--------	--	--	--	--	--	--	--	--	--------------



## 大雪山における登山道管理対策検討の経緯



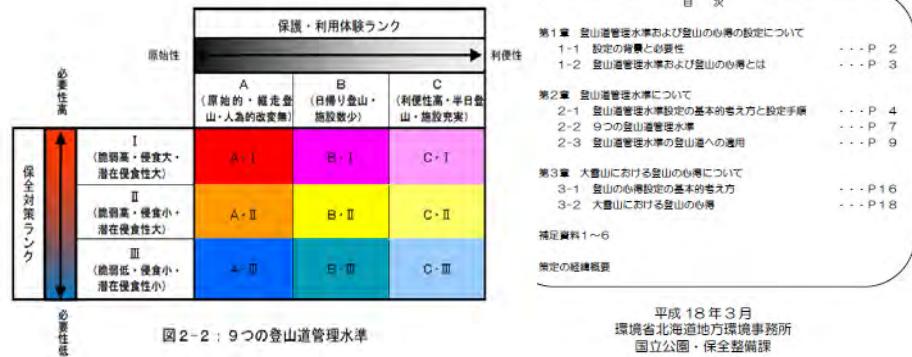
1990年頃	登山道と野営地におけるインパクト指摘
1996年	環境省による登山道全域調査
2001年	本省検討のケーススタディ（愛山渓）
2001～03年	登山道現状調査
2003年	愛山渓・旭岳地区を対象に集中的な調査
2004年	全域対象に「登山道の管理水準検討調査」
2005年	大雪山国立公園登山道管理水準と登山の心得
2010年	関係者によるワークショップ、情報交換会
2013年	登山道管理水準の見直しに着手
2015年	大雪山グレードの公表
2016年	技術指針の改訂と公開



## 大雪山における登山道管理水準と登山の心得



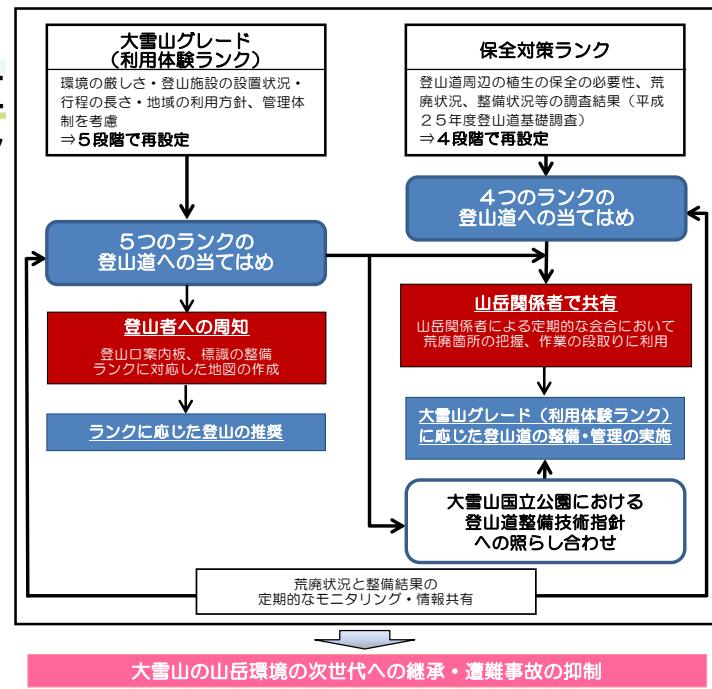
大雪山国立公園登山道管理水準と登山の心得



## 大雪山グレードの評価項目

構成要素	ランク	グレード5	グレード4	グレード3	グレード2	グレード1
行動判断の要求度・難易度						
評価項目	天候悪化時のリスク回避の難度	高い				低い
登山口等からのアクセス	遠い					近い
登山施設の充実度	簡素					充実
維持管理の程度	低い					高い
登山体験の程度						
評価項目	環境の雰囲気	原生的・原始的		都市的・人為的		
	利用密度	低い		高い		
	利用の雰囲気	静か		にぎやか		
	登山のレベル	挑戦的		手軽		
利用想定対象者		登山者		観光客含む		

## 枠組みと区分の見直し



## 大雪山グレード（利用体験ランク）

	グレード5	大雪山の極めて厳しい自然に挑む登山ルート
	グレード4	大雪山の厳しい自然に挑む登山ルート
	グレード3	大雪山の自然を体感する登山ルート
	グレード2	大雪山の自然とふれあう軽登山ルート
	グレード1	大雪山の自然とふれあう探勝ルート

大雪山の極めて厳しい自然に挑む登山ルート

- 地形的条件等から天候判断がより難しく、且つ登山口からの距離や避難小屋の間隔が長くエスケープ\*を取りづらい登山ルートや徒渉\*や岩場通過等高度な技術を要する登山ルート
- 自然の雰囲気の保持を最優先とした登山ルート
- 登山者自らのリスク管理が必須とされ、極めて高度な行動判断を要求される登山ルート

大雪山の厳しい自然に挑む登山ルート

- 地形的条件等から天候判断がより難しい登山ルートや登山口、ロープウェイ駅からの距離が長く日帰りに適さない登山ルート
- 自然の雰囲気の保持を最優先とした登山ルート
- 登山者自らのリスク管理が必要とされ、高度な行動判断を要求される登山ルート

大雪山の自然を体感する登山ルート

- 登山口、ロープウェイ駅からのアクセスが比較的良く、日帰り程度の距離で設定された登山ルート
- 歩行の快適性よりも自然の雰囲気の保持を優先した登山ルート
- 登山者自らの一定のリスク管理が必要とされ、一定の行動判断を要求される登山ルート

大雪山の自然とふれあう軽登山ルート

- 登山口、ロープウェイ駅舎からのアクセスが良く、比較的短距離で設定された登山ルート
- 段差処理\*、ぬかるみ対策等に努め、一定の歩行の快適性の確保に配意されている登山ルート

大雪山の自然とふれあう探勝ルート

- 温泉施設やロープウェイ駅舎からのアクセスが良く、比較的高低差が少なく設定された一般観光利用者向けルート
- 段差処理、ぬかるみ対策等に努め、一定の歩行の快適性の確保に配意されている探勝ルート

※公園計画に定められた路線のうち、林道等登山口までのアクセス路の通行止め、登山道の管理状況から登山者に案内ができないものについては、「非適用」として「大雪山グレード」を適用していません。

# 登山道整備技術指針

- ・登山道整備の振り返り
- ・ランク別の配慮
- ・維持管理方策
- ・実施体制の検討
  - －意見交換の場
  - －技術の普及
  - －山岳関係者との連携・協力体制
  - －一般登山者や企業の協力

<http://www.daisetsuzan.or.jp/management/t ozandouseibi/>

大雪山国立公園における登山道整備技術指針

2016年 改定版



平成28年3月  
環境省北海道地方環境事務所

## 保全対策ランクの評価項目

### 自然条件（植生・地形）

1 保全の必要性の高い植生（風衝地植物群落、雪田群落、高層湿原、高山荒原群落）や地形（構造土等の脆弱な周氷河地形）がある

2 保全の必要性の高い植生・地形に乏しい

### 荒廃状況（荒廃の程度、整備状況、木道等の状態、進行状況：地質、傾斜、利用圧）

1 登山道に大規模な荒廃がある、または登山道周辺に影響が及んでいる。  
あるいは、木道、階段工等登山施設の破損により通行困難な箇所が生じている。  
この10年間で荒廃が急激に進行、あるいは、今後5～10年で著しい進行が予想される。

2 登山道に大規模な荒廃がある、または登山道周辺への影響が及んでいるものの、この10年の進行速度は遅く、今後5～10年での進行も遅いと予想される。  
登山道に中規模、小規模な荒廃があり、この10年の進行速度は早く、今後5～10年で進行すると予想される。  
あるいは、木道、階段工等登山施設の破損が見られる。

3 登山道に中規模、小規模な荒廃があり、この10年の進行速度は遅く、今後5～10年での進行も遅いと予想される。または現在侵食は少ないが潜在的危険性がある。  
あるいは、木道、階段工等登山施設が整備されたが、登山施設周囲に小規模な侵食が見られる。

4 登山道内に荒廃した区間が少なく、この5～10年で拡大する危険性が低い。  
あるいは、木道、階段工等登山施設の整備済みで概ね安定している。

## 保全対策ランクの設定

### 保全対策ランク（4段階）の設定：荒廃状況と自然条件の組み合わせ

荒廃状況 自然条件	1	2	3	4
1	A	B	C	C
2	A	C	D	D

### 保全対策ランク

<b>A</b>	<b>保全上の課題が極めて大きい区間</b>
	・植生の保全の必要性の程度にかかわらず、大規模な荒廃があり急激に進行した。または、今後5～10年で著しく進む恐れがある。
	・植生の保全の必要性の程度にかかわらず、木道、階段工等登山施設の老朽化がひどい、通行困難箇所がある。
<b>B</b>	<b>保全上の課題が大きい区間</b>
	・保全の必要性が高い植生において、大規模な荒廃があり、徐々に進行している。
	・保全の必要性が高い植生において、木道、階段工等登山施設の破損が見られる。
<b>C</b>	<b>保全上の課題が中程度の区間</b>
	・保全の必要性が高い植生において、荒廃が中規模以下である。
	・保全の必要性が高い植生において、木道、階段工等登山施設が整備済みである。
	・保全の必要性の高い植生に乏しいが、大規模な荒廃があり、徐々に進行している。
	・保全の必要性の高い植生に乏しいが、木道、階段工等登山施設の破損が見られる。
<b>D</b>	<b>保全上の課題が顕著ではない区間</b>
	・保全の必要性の高い植生に乏しい区間において荒廃が中規模以下である。
	・木道等登山施設が整備済みで木道、階段工等登山施設の破損が見られない。

## 大雪山国立公園ビジョンに基づく登山道等の協働型管理の進め方

資料1-1

＜大雪山国立公園ビジョン＞  
まもり、活かし、つなげよう みんなでつくる、世界を魅了する大雪山国立公園

- (1) 大雪山の自然環境が守られ、より豊かになった国立公園 ⇒ 大雪山グレードに応じた保全  
 (2) 魅力を活かし、質の高い利用体験ができる国立公園 ⇒ 大雪山グレードに応じた管理と利用  
 (3) つながっていく国立公園 ⇒ 来訪者に向けた情報発信  
 ⇒ 大雪山国立公園に関わるすべての人々に向けた価値の発信  
 (4) みんなが協働して管理運営する国立公園 ⇒ 協働型管理体制の維持、管理運営への利用者の参加・地域連携  
 ⇒ みんなが学び成長し将来世代へ引き継ぐ国立公園

### 「協働型管理」によるビジョンの実現



各取組の実施にあたっては、相互の連携を図るとともに、実施した取組結果を点検し適宜見直しを行なながら推進

## 登山道管理水準の改訂のメンバー

- 平成16年
- 研究者(植物)
- 研究者(地質)
- 研究者(地形)
- 研究者(造園) 2名
- 研究者(社会)
- 山岳ガイド2名(札幌)
- 地元山岳会
- ガイド・観光協会

- 平成25年
- 研究者(植物)
- 研究者(地形)
- 研究者(造園)
- 地元ガイド2名
- 山岳連盟代表2名
- 事業者
- ガイドブック著者
- 山岳ガイド・観光協会
- 市民団体(札幌)

## 大雪山国立公園愛別岳滑落事故に関する訴訟

- 2019年10月 愛別岳に至るルートで登山者が滑落し、死亡
- 登山者の遺族が国と北海道に対し、損害賠償請求の裁判
- 当該歩道に営造物責任があるか、通常有するべき安全性を欠いたかが争われた
- 2024年10月 最高裁判所が原告の請求を退けた
- 「行政が歩道を管理する場合には、その歩道について、安全であることが要請される遊歩道なのか、それとも、利用者のリスク管理が原則となる登山道なのかをあらかじめ区別して管理する必要がある」(溝手, 2025)



## ニュージーランドにおける歩道と利用者の区分

歩道のカテゴリー	利用者タイプ
Path : 園路	Urban Residents: 都市住民
Short Walk : 小道	Short Stop Travellers: 短時間利用者
Walking Track : 歩道	Day Visitors: 日帰り利用者
Tramping Track(Great Walk – Easy Track) : 軽登山道	Backcountry Comfort Seekers: 快適志向ハイカー
Tramping Track : 登山道	Backcountry Adventurers: 冒険志向ハイカー
Route : 長距離道	Remoteness Seekers: バックカントリー利用者

## 登山道の管理計画をつくるには

- 環境、施設、利用に応じたメリハリのある維持管理方針と共有
- 地域の課題を共有する場の設定
- できるだけ広い関係者の参画
- 指針とアクションプラン
- 実行による成果のイメージづくり
- 成果のモニタリングとフィードバック





## ～新たな自然公園管理に向けて～



2005年6月  
山岳レクリエーション管理研究会



## はじめに/PREFACE

もしあなたが山のし尿問題に頭を痛め、早急にトイレを設置すべきだと考えているとしよう。あなたはすでに、どんな形式のトイレにしたらいいかということに関心が行っているかもしれない。しかし、結論を急ぐ前に、そもそもその場所にトイレを作つていいものかどうかということにも考えを巡らせるべきではないだろうか？山のトイレはその山域の景観や雰囲気に大きな影響を及ぼすし、またトイレの設置によって一層の登山者の増加を招くかもしれない。それによって、あなたの大好きな雰囲気の良いキャンプ地が俗化してしまう恐れもある。むろんだからといって、このままし尿を垂れ流していいわけでもない。このような問題をどう考えたらいいだろうか？

あるいは、あなたは最近増えている高山帯の木道について違和感を持っている、少し作りすぎではないかと感じているかもしれない。確かに登山靴が泥で汚れるのはいやだし、汚れを避けて高山植物の植生を踏み荒らすのは避けたい。もちろん、少しの雨でもズブズブになってしまうような湿原では、しっかりした木道が必要かもしれない。けれども、最近の木道は、普通に歩けば靴も汚れず植生も荒れない場所にまで敷かれ、まるで都市公園を歩いているような気分にさせられることがある。あなたの違和感は、そういうところにあるのではないだろうか？では、どういうところに木道を設置し、どういうところには設置すべきでないのだろうか？

これらの問い合わせへの答えが欲しい方は、ぜひこの小冊子を読んでいただきたい。何かヒントが見つかるのではないかと思う。



## 目次/CONTENTS

第1章 ROSとは何か？ ..... 2

第2章 自然公園の諸問題にROSはこう答える ..... 7

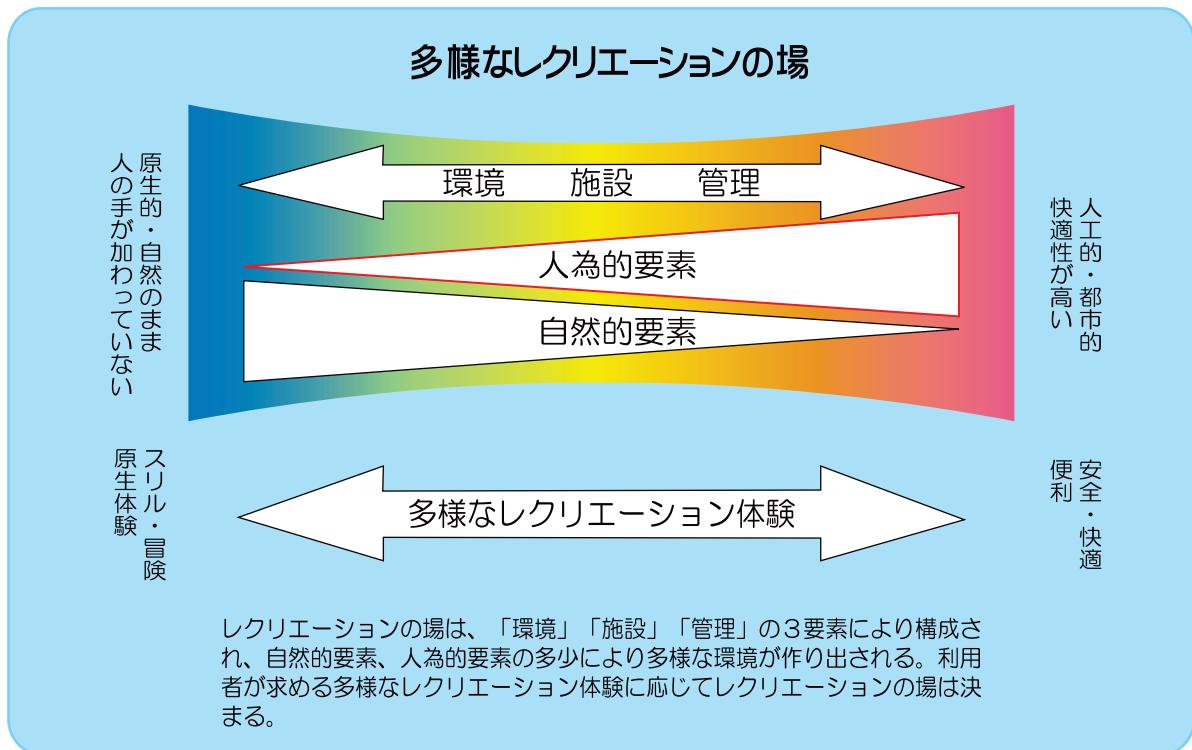
第3章 自然公園計画にどのようにROSを活用できるか？ ..... 12

# ROSとは何か？

「便利さや快適さも必要だが、ときには静けさや自然との一体感も大切にしたい」。

ROSは、人々が求める様々な質のレクリエーション体験を提供するためのゾーニング手法です。

ROSとはRecreation Opportunity Spectrum の略で、1970年代に米国の森林局によって開発された考え方です。ROSでは様々な利用者が様々なレクリエーション体験を求めていることを前提に、レクリエーション地域をいくつかのゾーンに区分します。便利さや快適さのために人間の手が加えられるゾーンがある一方で、原生的な自然環境やそこでの体験を保全することが優先されるゾーンも存在します。



—ROSの概念図—

## ■ ROSの考え方

ROSでは、これらのゾーンで得られる体験の質が「環境」「施設」「管理」という3つの要素によって成り立っていると考えます。「環境」とは自然らしさや人との出会いなどレクリエーション体験の舞台となる環境を指し、「施設」とは登山道、山小屋・キャンプ地、トイレなどレクリエーション体験に必要な施設を指します。そして「管理」とは、標識や規制などレクリエーション行動をコントロールする行為を指します。

たとえば、便利さや快適さを優先するゾーンでは、もともとの自然が改変され、人との出会いも多い「環境」となります。ここでは、「施設」は歩きやすく整備された登山道など快適で便利なものが期待され、「管理」も安全を最優先にした誘導や規制が行われます。一方、原生的な自然環境やそこでの体験を優先するゾーンでは、手つかずの自然が残り、人との出会いがほとんどない静かな「環境」があり、逆に便利・快適・安全のための「施設」や「管理」はありません。

ROSの考え方に基づいたゾーニングによって、管理者にとっては場所ごとの施設整備・管理目標が明確になり、利用者にとっては期待する体験が得られる場所が明確になります。

では、大雪山国立公園を例に考えてみましょう。

# ROSに基づいた 現状利用図

- 3 -



# ROSに基づいた 管理目標図(試案)



# 大雪山

アール・オー・エス

## ROS管理目標 イメージ図



原生  
区域

自然  
区域

準自然  
区域

準整備  
区域

整備  
区域

原生体験・静けさ・孤独

安全・快適・便利



ROS管理目標は、3つの要素（縦方向）と5つの区域（横方向）からなっています。3つの要素とは環境・施設・管理からなり、利用者の多様なレクリエーション体験に影響を与えると考えられるものです。一方、5つの区域とは、原生・自然・準自然・準整備・整備の各区域であり、レクリエーションの場を示しています。この図では原生区域にむかうほど、原生体験・静けさ・孤独といった要素が重視されます。逆に整備区域にむかうほど、安全・快適・便利といった要素が重視されます。

備区域にむかうほど、安全・快適・便利といった要素が重視されます。この図を管理目標として、管理者は規制計画や施設計画を策定することができますし、利用者は自分的好みにあつたレクリエーションの場を選択することができます。それによって、大雪山で多様なレクリエーション体験を確保することができるのです。

# 自然公園の諸問題に ROSはこう答える

ROSの考え方を導入すれば、自然公園管理の様々な問題に的確に対処することができます。ここでは、大雪山国立公園を事例として考えます。

## ■ 登山道の荒廃

Q. 登山道の荒廃が目立ってきていますが、  
登山道を修復するかどうかの判断にROSは役立ちますか？

A. はい、役立ちます。レクリエーション体験の質を守るという観点から、登山道修復のための基準を示すことができます。この問題では、荒廃による自然への影響を考慮することはもちろんのこと、そこを訪れる利用者の認識についても検討する必要があります。原生性の高い区域では、原生的な自然らしさを損なわない範囲で修復を行うことが求められますし、より利便性が求められる区域では、歩き易さを重視した整備が求められます。原生区域では周辺の自然との調和を最大限に守る必要があるので、人工的な感じのする修復は行なえません。一方、整備区域では、人工的な施設の設置などもある程度許容されますから、コンクリートなどを使用して荒廃を防ぐための土木工事を行なうことも許容されます。たとえば、我々はトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますから、修復を行う必要がある場合には、自然らしさを極力損なわないように配慮した修復工事を行うこととなります。

## ■ 木道の設置

Q. 最近、高山帯で過剰な木道設置によって雰囲気が損なわれた、  
という批判があります。ROSはこの問題に対してどう答えますか？

A. 木道を設置する目的は、植生の保護と歩きやすさの確保にあります。しかし、歩きやすさを優先して必要以上に木道整備を行うと、高山帯の自然らしさが失われることになります。本来、高山帯にある原生区域では、自然が保たれた雰囲気を提供するのが目的ですので、歩きやすさを確保するための木道設置は原則として行うべきではありません。たとえば、我々の試案ではトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますから、ぬかるんでも植生が維持される限りは木道の設置をしないことを提案します。ただし、植生の保護が必要な場所では、原生区域であっても木道を導入せざるを得ない場合があります。この場合は景観を保つようなデザインを採用して、高山帯の雰囲気をできる限り損なわないように配慮します。これに対して、整備区域では歩きやすさの確保を優先した木道の設置も可能です。

## ■ バリアフリー化

Q. 国立公園だから登山道はできる限りバリアフリーにすべきだと思いますが、ROSではどのように考えますか？

A. ROSではハンディキャップをもつ人たちが国立公園をもっと楽しめるように整備することを主張します。しかしながら、すべての場所をバリアフリーにすることは考えません。それはROSが多様な人々の利用を前提としているため、すべての区域をバリアフリー化すると、ハンディキャップを持たない人々のレクリエーション体験の機会を損なうことになるからです。整備区域においては、人工的な施設の設置などもある程度許容されますから、バリアフリー化を行うことができます。しかし原生区域では、自然環境の保全およびレクリエーション体験の保全を考えて、敢えてバリアフリー化は行いません。たとえば、姿見周辺は整備区域に区分し、車椅子でも散策できるようにバリアフリー化すべきと考えます。



- 8 -

## ■ トイレ問題

Q. 高山帯のようなトイレのない場所で利用者のし尿が問題となっています。ROSはこの問題に対して解決の糸口を提供できますか？

A. はい、できます。高山帯でのし尿問題は、利用者の増加によって、自然の分解スピード以上にし尿が増えたことによって生じています。対策としては2つが考えられます。1つは利用者の増加を前提として、し尿処理をトイレの設置によって解決する方法です。もう1つは利用者の入り込み数を抑え、自然が分解できる程度のし尿の量を常に守ることです。これらの解決策をROSの立場で考えると、前者は多くの入り込み数を許容するゾーン（整備区域）として区分し、トイレを設置することになります。これに対して、後者は利用者の入り込み数を規制したり、し尿を持ち帰ったりすることによって、し尿量をコントロールするゾーン（原生区域）として区分することとなります。たとえば、我々はトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますが、そうなるとここではトイレは設置せず、入り込み数を抑えたり、携帯トイレの使用を促したりする対応を探ることになります。

## ■ 混雑の緩和

Q. 「以前は静かだった山が、最近利用者が増えて混雑するようになった」といった苦情を耳にします。ROSはこの問題に対して役立ちますか？

A. はい、大いに役立ちます。ROSはこのような問題に対処するために生まれてきた概念です。苦情の原因は、静かな環境を求める利用者と、混雑をあまり気にしない利用者とが、同じ場所を利用している点にあります。ROSでは、前者の利用者には原生区域を、後者には整備区域を利用できるように設定します。これによってどちらの利用者にも満足してもらうことが可能です。原生区域では、利用者数やアクセスの制限などを通じて、原生的で自然が保たれた静かな環境を提供します。たとえば、我々の試案ではトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますから、ここでは入り込み数を抑えたり、短縮登山道を閉鎖したりすることになります。

## ■ 団体登山ツアー

Q. 現在、大人数の団体登山ツアーが盛んに行われていますが、ROSはこうした団体登山ツアーをどう考えますか？

A. 原生区域では行うべきではないと考えます。大人数の団体登山ツアーは、原生区域の静けさを損ない、連続的に高山植生の踏みつけを発生させるため、原生区域の自然らしさを大きく損なう危険性があります。したがって、このような場所では、いわゆるエコツアーのような少人数で、生態的・社会的な影響が少ないツアーを推奨します。

## ■ 遭難事故と入山禁止

Q. かつて、クワウンナイ沢で遭難事故があったことをきっかけに、入山禁止措置がとられたことがありました。ROSではこの問題に対してどう考えますか？

A. この問題は自己責任をどのように捉えるかに深く関わっています。ROSの考えに従えば、危険や冒険的な要素を含む原生区域では、利用者は自己責任で行動することが前提です。したがって、原生区域と考えられるクワウンナイ沢では、事故が起きたとしても管理者の責任はないと考えます。もちろん原生区域であることを周知徹底させることが前提です。一方で、整備区域では安全・便利・快適なクリエーション体験を提供するとしており、利用者もその前提で訪問するため、ここでの事故については管理者の責任がないとは言えません。利用者も管理者もこうした合意の下に、利用や管理を行うことが求められます。

## ■高山植物の保護

Q.登山道の踏みつけによって登山道脇の高山植物が消滅しています。ROSはこれに対してどう役立ちますか？

A.高山植物を直接守ることはできませんが、登山道整備の指針をすることによって、高山植物の保護に役立てるることができます。登山道脇の植生踏みつけは、登山道のぬかるみや混雑により、利用者が登山道をはすりて歩いてしまうことによって起きます。これに対しては、登山道の適切な維持管理や利用者数の調整によって対処することが必要です。対策としては2つの方法が考えられます。1つは、大人数の歩行を前提として整備区域に区分し、踏みつけに耐えられるような整備をする方法です。もう1つは、より原生性の高い区域に区分して、利用者数を減らす方法です。たとえば、姿見は整備区域への区分を推奨していますから、この場合は利用者数の制限は行なわずに、ぬかるみを防ぐ排水溝（水切り）やロープの設置を行うことになります。



## ■高山植物の盗掘

Q.希少な高山植物が盗掘によって減少しています。  
ROSはこの問題に対処できますか？

A.盗掘は犯罪行為として厳しく取り締まることが抜本的な対策なので、ROSで直接的に対処することはできません。しかしながら、ROSではより幅広い観点からの次のような考え方を提示することができます。高山植物の盗掘は、登山口からのアクセスが比較的容易で、かつ監視の目が届かない場所で起きます。したがって、高山植物の生育地から登山口を遠ざけるか、監視の強化や利用者を多くすることによって盗掘しにくい環境を作ることが可能です。ROSでは、前者では、より原生性の高い区域に区分し、登山口から生育地へのアクセスを困難にすることが考えられます。これに対して後者では、より利便性の高い区域に区分し、盗掘監視カメラの設置や監視員の増員、他人の目を増やすなど間接的な抑止力を発揮して対処します。



## ■景観保全

Q.人工物の設置によって、美しい風景が台無しになってしまうことがあります。  
たとえば、風力発電のために風車を設置する問題について、  
ROSではどのような解決策を提示できますか？

A.自然しさを守る観点から、人工物設置の是非を検討することができます。この問題は、人工物のある景観と公園利用者が抱く自然しさのイメージとが合わないことで起きます。風車のような人工的な施設を設置できるのは、利用者のイメージが損なわれない区域に限られます。したがって、整備区域では風車の設置も検討できますが、より原生的な区域では設置はできません。さらに整備区域に設置する場合にも、原生的な区域から人工物が見えないように配慮する必要があります。たとえば、姿見周辺は整備区域に区分されますから、風車を設置することも検討可能です。ただし、隣接する準整備区域から風車が眺望されないように設置する必要があります。

## ■ヒグマとの遭遇

Q.ヒグマと利用者との遭遇事件が多発しています。  
ROSはこの問題にどのように対処できますか？

-11- A.解決のための枠組みを作ることができます。そもそもこの問題は、ヒグマの生息地に人間が入り込んでいることで発生しています。したがって、これに対処するには、人間を入り込ませないようにするか、人間が入り込んでも直接接触しないように管理するか、2通りの方法があります。ROSでは、前者の方法として、このエリアを原生区域に区分して利用者数を抑え、遭遇を減らします。一方後者としては、これを整備区域に区分して監視員を増強するなどし、ヒグマとの遭遇を最小限にします。たとえば高原沼は、準自然区域に区分することを我々の試案では推奨していますから、後者のように、利用者の入り込みは許容した上で監視員を配置しますが、状況に応じて登山道を閉鎖することもあります。

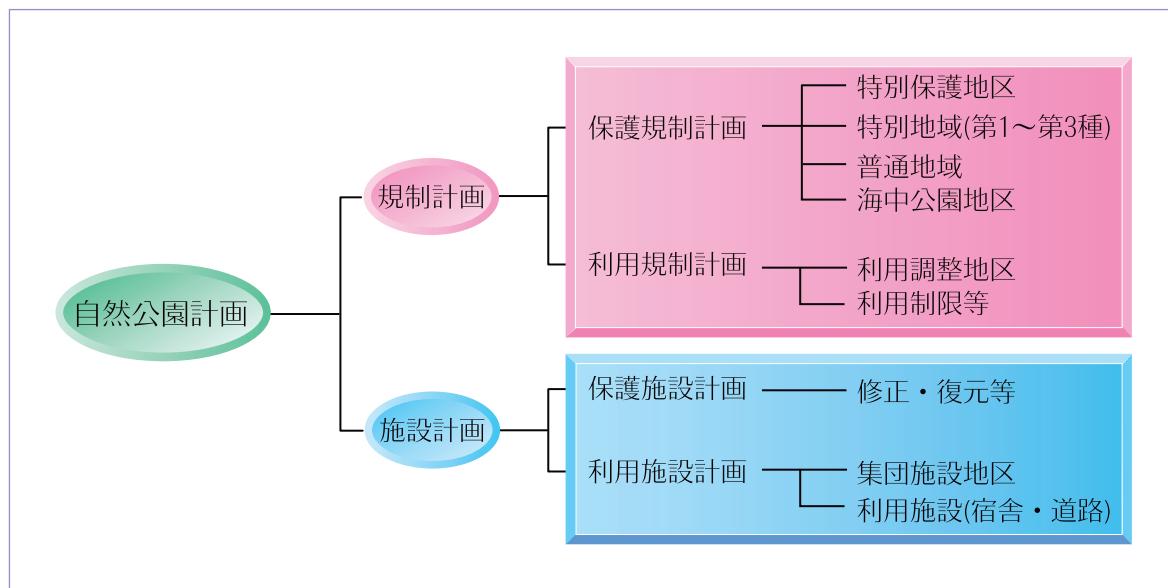


# 自然公園計画に どのようにROSを活用できるか？

現在、大雪山国立公園をはじめとした自然公園は、公園ごとに計画を定めて管理が行われています。ここでは、自然公園計画について簡単に説明してから、この計画にROSの考え方を取り入れるとどのような公園管理を行うことができるか、考えてみることにしましょう。

## ■自然公園計画の概要

自然公園計画は、大きく規制計画と施設計画に分けられます。規制計画は保護規制計画と利用規制計画から構成されます。保護規制計画では、保護すべき場所の区割り（地種区分ニゾーニング）を行い、保護のために規制すべき行為を定めます。利用規制計画は自然環境の保全や混雑の緩和を目的として定められます。その中には入山規制ができる利用調整地区制度が含まれます。一方、施設計画は保護施設計画と利用施設計画からなります。保護施設計画では、植生を保護するためのマットや柵の設置を行います。利用施設計画では、ビジターセンターや登山道の配置などについて定めます。



-12-

## ■ROSの活用

自然環境の保護については、保護規制計画で定められている地種区分（ゾーニング）によって、保護すべき場所が明確に区分され、規制される行為が明示されています。一方、利用規制計画と利用施設計画については、利用のための具体的方針を計画するようになっておらず、自然環境保全のための入り込み規制などについても、具体的な取り扱い方針は明確ではありません。また、山岳地域における混雑が各地で問題になっていますが、この点についても触れられていません。

そこで、ROSを下敷きとして活用することにより、規制計画及び施設計画の充実や、利用と保護に関する計画上の関連性の明確化など、現行計画を補完することが可能となります。

## ■ トムラウシ山を例に

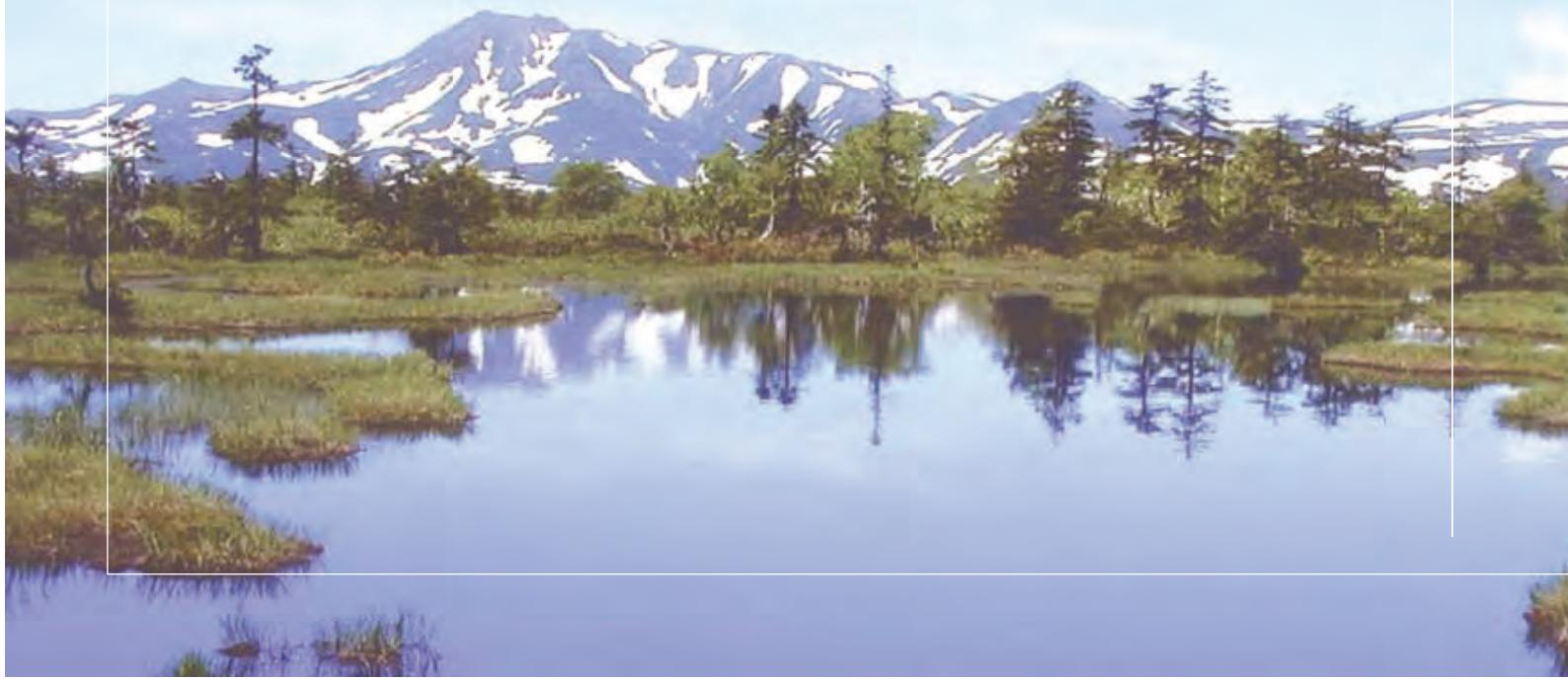
トムラウシ山を事例として考えてみましょう。現行計画では、利用施設計画で登山道を整備することとされています。しかし、利用者にどのような体験を提供すべきかは書かれていませんし、どのような登山道を整備すべきかも必ずしも明らかではありません。そこで、ROSを用いると次のような対応が可能となります。

トムラウシ山は大雪山を代表するすぐれた山岳環境を残しているので、たとえば原生区域として区分すると、山小屋は設置しない、階段などの歩きやすさを優先した登山道の整備は行わない等、施設整備を軽微なものに留めるといった方針を明確に出来ます。次に、利用計画と保護計画との関係について考えてみましょう。

トムラウシ山には、近年非常に多くの登山者が訪れており、登山道脇の植生踏み付けや、南沼キャンプ地における自然環境の悪化、混雑による体験の質の低下など、さまざまな問題が発生しています。トムラウシ山は現在の国立公園計画の保護規制計画によって特別保護地区に指定されていますが、このような問題に対処するためには、もう少し踏み込んだ対応が必要です。

たとえばトムラウシ山を原生区域として区分すると、体験の質を確保するという点から、利用者数を制限する必要があります。そこで、利用規制計画において利用調整地区の導入や、短縮登山道の廃止によりアクセスを悪くすることで利用者数を制限するといった対策が見えてきます。また、これによって保護施設計画で大規模な保護施設を整備する必要がなくなります。他方、もしトムラウシ山を、原生性がやや低い自然区域とするなら、ある程度の登山者の入り込みを想定しなければなりませんから、保護施設計画で、よりしっかりした植生保護施設を作る必要が生まれます。

このように、ROSを用いることによって、自然公園計画の枠組みの中で対応可能な選択肢を絞り込むことができ、より包括的で実行性のある計画とすることができます。



## ■終わりに

いかがでしたか。ROSがどのようなものであるかご理解いただけましたか。ROSは自然公園全体の利用と管理のあり方を考える上で、大変有用な考え方であり手法です。ROSに基づくゾーン区分は、自然公園によって当然違ってくるものです。我々は大雪山国立公園を5つのゾーンに区分しましたが、いつもこの5区分が妥当なわけではありません。また、各ゾーンの利用と管理のあり方も、個々の自然公園によって異なってくるはずです。

みなさんも自分の関心のある自然公園を題材としてROSを考えてみませんか。

## 山岳レクリエーション管理研究会

小野 理 北海道環境生活部 総務課主任  
庄子 康 北海道大学大学院 農学研究科助手  
土屋 俊幸 東京農工大学大学院 共生科学技術研究部助教授  
広田 純一 岩手大学 農学部教授  
八巻 一成 (独)森林総合研究所北海道支所 主任研究官  
山口 和男 (有)自然環境コンサルタント 代表取締役

(肩書きは2005年6月現在。50音順)

-14-



小野 理



庄子 康



土屋 俊幸



広田 純一



八巻 一成



山口 和男



---

アール・オー・エス

## ROS ~新たな自然公園管理に向けて~

発行年月 2005年6月

発行者 山岳レクリエーション管理研究会

代表 庄子 康

連絡先 札幌市北区北9条西9丁目

北海道大学大学院

農学研究科森林政策学分野

電話 (011) 706-3342

E-mail yshojo@for.agr.hokudai.ac.jp

---

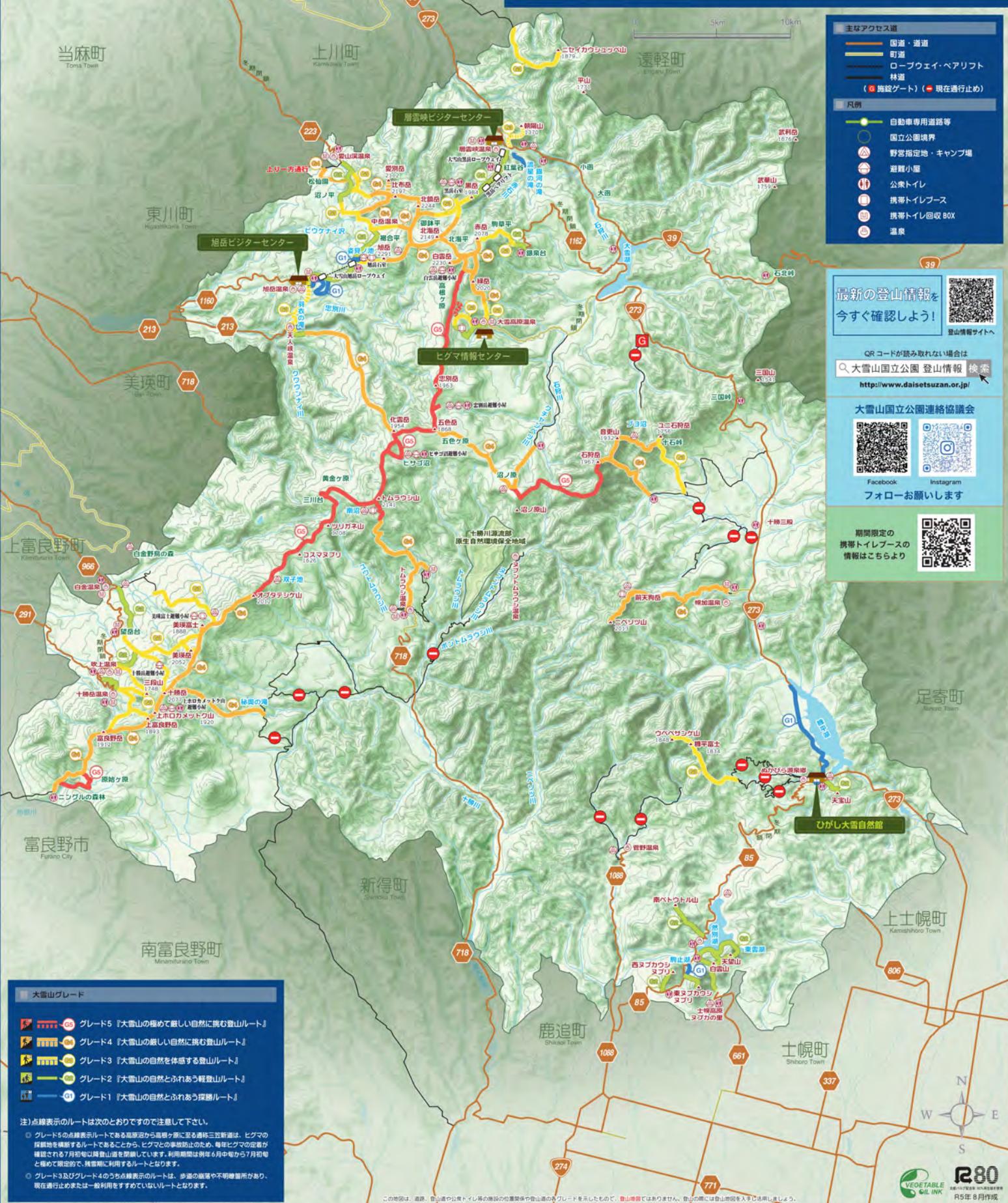
## 大雪山国立公園



## 登山者のみなさまへ

大雪山国立公園連絡協議会 発行 ご案内マップ(携帯トイレ情報入り)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図 200000(地図面像)を複製したものである。(承認番号 平20第28、第244号)





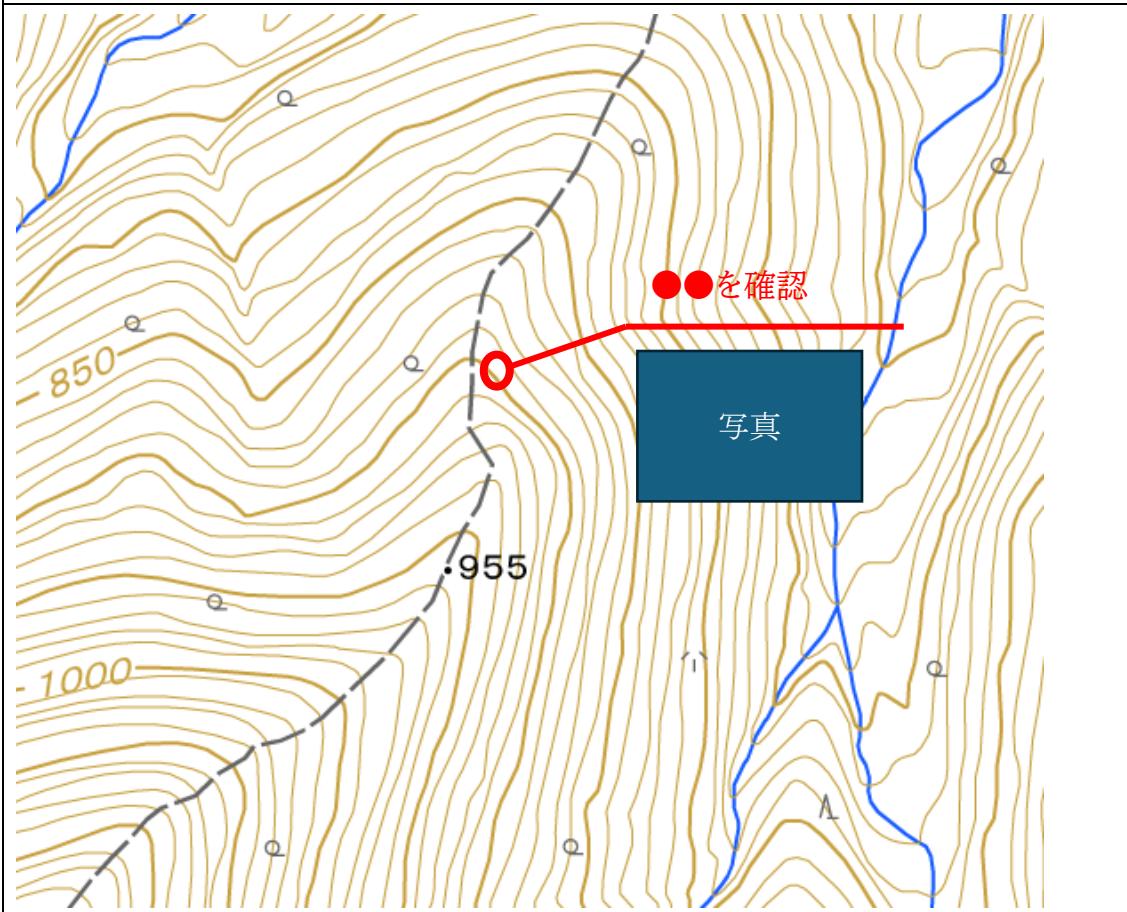
## 各構成員からの登山道状況に係る情報の持ち寄りについて

日高山脈襟裳十勝国立公園について把握された情報を、登山道部会で継続的に共有していくことが必要。気づきの点を構成員が共有しやすいよう、以下のような報告例を作成したので参考にしていただきたい。共有の仕組みについては、事務局において調整し、追って連絡する。

### 報告例

報告者	北海道地方環境事務所 環境 太郎
日時	令和●年●月●日(●)●時頃
対応内容	●●

### 場所



## 登山道利用状況調査（環境省発注業務）について

### ■調査目的

登山道部会における検討課題の基礎資料とするため、日高山脈襟裳十勝国立公園の公園計画歩道を対象として実地調査を行うもの（今年度環境省業務としては幌尻岳線道路（歩道）を対象とする）。

### ■調査期間

2025年7月7日～18日

※調査期間のうち、3日間程度調査を実施（天候によって決定）

### ■調査概要

幌尻岳の登山道について、幕営可能性地における裸地状況の調査および登山道崩壊状況調査等の調査を行い、現状を記録する。また、調査地点等の情報を GIS データ化した地図に落とし込む。

### ■調査実施内容

調査項目	調査範囲および調査内容
登山道利用状況調査	七つ沼カール～戸蔵別岳～幌尻岳～七つ沼カール ※稜線上での幕営可能性地において裸地状況の撮影および植生調査ならびに登山道崩壊状況の調査を実施 調査範囲は図1参照、調査の詳細については表1および表2を参照

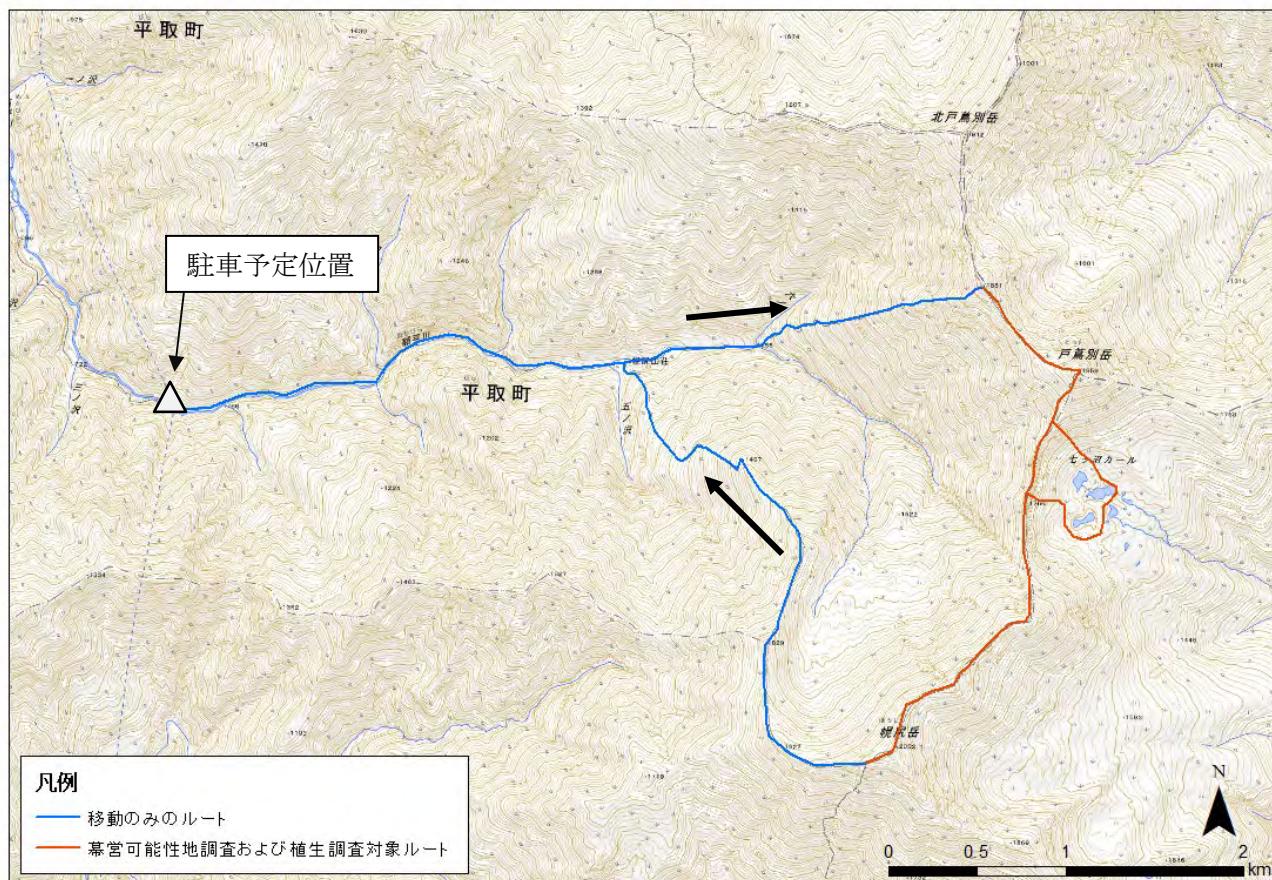


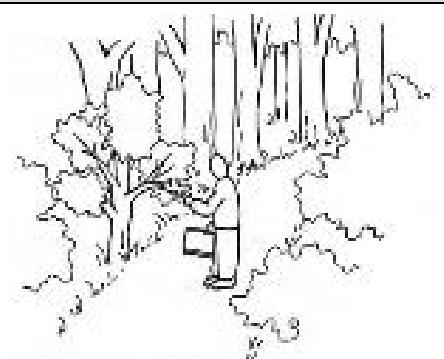
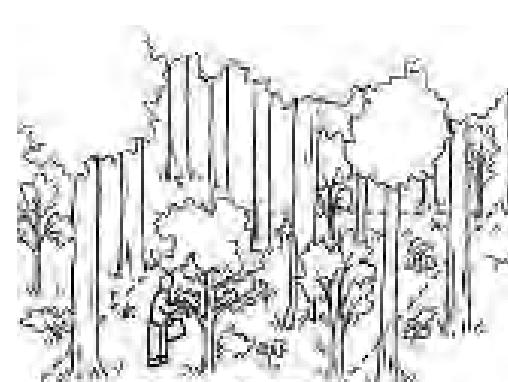
図1 現地調査実施箇所位置図

※駐車予定位置までは車両で林道を移動予定

表 1 裸地状況の撮影および登山道崩壊状況の調査

調査項目	調査方法	調査内容	調査イメージ
裸地化状況および登山道崩壊状況	踏査	踏査による目視確認により、幕営（テント設営）の可能性があると判断される場所および登山道が崩壊していると思われる場所について、その位置を GPS 端末により記録する。	 <p>赤い点：調査位置の記録 緑の線：移動経路の記録</p>
写真撮影	デジタルカメラおよびデジタル360度カメラによる撮影	一般のデジタルカメラおよびデジタル360度カメラを用いて、幕営の可能性があると判断された場所の現況（地形、地質、植生の状況など）を記録する。	 <p>360度カメラによる植生の記録</p>

表 2 植生調査の方法一覧

調査項目	調査方法	調査内容	調査イメージ
植物種確認	目視確認	対象地において目視確認により、植物種を記録する。	
群落組成	コドラー調査	コドラー（任意の大きさの正方形）を設け、その中の各階層の出現種を記録する、また、種類別に被度・群度を記録する。（ブラウン-プランケ法）	

## 報告資料2 各構成員からの情報提供資料

- (1) 登山道に通じる国有林林道の通行状況ほか  
(日高北部・南部・十勝西部森林管理署)
- (2) 十勝西部森林管理署管内の主要山岳及び林道状況(十勝西部森林管理署)



国民の森林・国有林

# 登山道に通じる国有林林道の通行状況

令和7年6月23日  
 林野庁北海道森林管理局  
 日高北部森林管理署  
 日高南部森林管理署  
 十勝西部森林管理署

山岳名	標高m	森林管理署	林道名	市町名	林道の管理者	令和7年度の林道開放期間	関連山岳名	備考
幌尻岳	2,052	日高北部	糠平、幌尻	平取町	平取町/日高北部署	(バス運行期間) 7月1日～9月30日 ※ゲートは非開放	戸萬別岳	問合せ先 平取町役場観光商工課 電話：01457-3-7703
			チロ口	日高町	日高北部署	6月14日～9月30日	ヌビラ岳・北トッタバツ岳	
		日高南部	新冠	新冠町	新冠町/日高南部署	6月下旬～9月30日	イドンナップ岳	
チロ口岳	1,880	日高北部	パンケヌシ	日高町	日高北部署	6月28日～8月31日		
神威岳	1,600	日高南部	元浦川	浦河町	日高南部署	通行止め (道道被害により通行止)	ペテガリ岳	
芽室岳	1,754	十勝西部	上羽蒂、オマベツ	清水町	十勝西部署	常時開放		
久山岳	1,411	十勝西部	旭山	清水町	十勝西部署	林道被災により閉鎖		
伏美岳	1,792	十勝西部	トムラウシ沢	芽室町	十勝西部署	林道被災により閉鎖		復旧工事による落石の危険があるため、徒步での通行も不可
戸萬別岳	1,959	十勝西部	トムラウシ沢	芽室町	十勝西部署	林道被災により閉鎖		
エサマントッタバツ岳	1,902	十勝西部	戸萬別川、エサマツ戸萬別	帯広市	十勝西部署	常時開放(ヒュッテから5.7km地点で通行止め)		
十勝幌尻岳	1,846	十勝西部	戸萬別川、オビリホツ	帯広市	十勝西部署	常時開放		
ペテガリ岳	1,736	十勝西部	歴舟川支流	大樹町	十勝西部署	常時開放(ただしゲートから1.5km先林道崩壊のため通行止め)		
楽古岳	1,471	十勝西部	札楽古	広尾町	十勝西部署	林道被災により閉鎖		

登山者の皆様へ

(令和7年度情報)

現在、十勝西部森林管理署管内のトムラウシ沢林道は、工事のため徒步も含めて通行止めです。

当署管内から伏美岳まで縦走した場合に、同林道を通行して芽室町に下山することはできません。



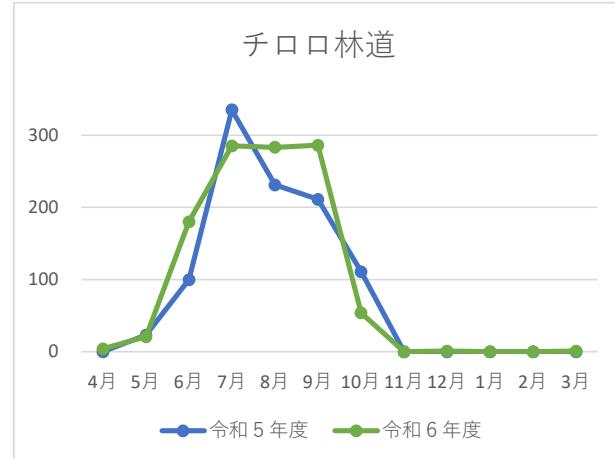
林野庁北海道森林管理局  
日高北部森林管理署

# 日高北部森林管理署管内の入林者名簿記載者数

## 令和5年度と令和6年度(国立公園指定)の比較

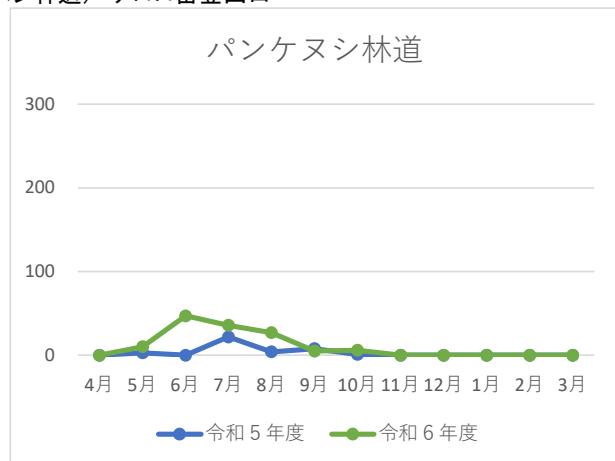
林道・月別入林者名簿記載者数(チロ口林道終点) ヌカビラ岳～北戸鳶別岳～幌尻岳登山口

	令和5年度	令和6年度
4月	0	4
5月	23	21
6月	100	180
7月	335	285
8月	231	283
9月	211	286
10月	111	54
11月	0	0
12月	0	1
1月	0	0
2月	0	0
3月	0	1
合計	1,011	1,115



林道・月別入林者名簿記載者数(パンケヌシ林道) チロ口岳登山口

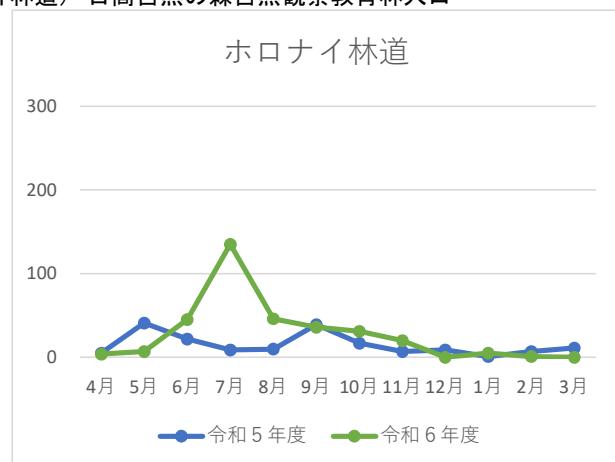
	令和5年度	令和6年度
4月	0	0
5月	3	10
6月	0	47
7月	22	36
8月	4	27
9月	8	5
10月	1	6
11月	0	0
12月	0	0
1月	0	0
2月	0	0
3月	0	0
合計	38	131



(パンケヌシ林道については、令和5年度は通行止め)

林道・月別入林者名簿記載者数(ホロナイ林道) 日高自然の森自然観察教育林入口

	令和5年度	令和6年度
4月	5	4
5月	41	7
6月	22	45
7月	9	135
8月	10	46
9月	39	36
10月	17	31
11月	7	20
12月	9	0
1月	1	5
2月	7	1
3月	11	0
合計	150	330



登山道に通じる国有林林道の通行状況  
日高北部森林管理署

日高森林計画区  
日高北部森林管理署

森 林 位 置 図

日高町

縮 尺 1 : 50,000  
( 5 - 1 )

▲チロ口岳・スカビラ岳・北トッタベツ岳

パンケヌシ林道入口

登山道入口

チロ口林道入口

登山道入口

チロ口岳

スカビラ岳

北トッタベツ岳

凡 例	
▲	登山等目的地
▼	登山道入口
●	林道起点(BP) 林道終点(EP)
■	車両通行止
○	被災地点

1 : 50,000

東大西支局

新井町

西山市

( 1. 千葉 )

日高南部森林管理署

新井町

( 桑野田 )

# 令和7年度の取組状況（4～6月）

日高北部森林管理署



## 保護林の案内板の設置

5月15日（木）、日高山脈森林生態系保護地域内の「幌尻（ポロシリ）原生林」に案内版を設置。同地は、国立公園第2種特別地域内。この林分は過去の施業履歴がなく、日高山脈における山地帯上部の原生的な森林（トドマツ、エゾマツが優占）の姿を今日に伝えている貴重な存在。



## 日高自然の森自然観察教育林の現地確認

5月27日（火）、日高自然の森自然観察教育林の視察等確認を、日高町、同町教育委員会、国立日高青少年自然の家と合同で実施。



## 鶴川・沙流川河岸浸食等調査

6月6日（金）日高北部森林管理署では、室蘭開発建設部鶴川沙流川河川事務所が実施する河岸浸食等調査のために飛行する北海道開発局の災害対策ヘリコプター「ほっかい」に同乗し、上空から国立公園区域を含む管内国有林野を点検・確認



## 十勝西部森林管理署管内主要山岳及び林道状況

R7.6.11現在

市町村名	山岳名	関連山岳	林道	林道状況	林道ゲート	R6入山者数	R7入山者数
清水町	剣山 (1,205m)		－	－	－	1,589	324
清水町	ペケレベツ岳 (1,531m)		－	－	－	208	13
清水町	芽室岳 (1,753m)		オマベツ林道	異常なし 通行可	開放中	50	94
清水町	久山岳 (1,411m)		旭山林道 旭山第一支線林道	林道決壊のため2.6km のうち0.7km地点で通行 不可	閉鎖中	回収不能に つき不明	回収不能に つき不明
芽室町	伏美岳 (1,792m)	ピパイロ岳 北戸蔦別岳	トムラウシ沢林道	工事中のため7.6kmの うち0.5km地点で通行 不可	閉鎖中	同上	同上
帯広市	エサオマントッタペツ岳 (1,902m)		戸蔦別林道 エサオマン戸蔦別林道	林道決壊のため17.5km のうち13.9km地点で通行 不可	開放中	同上	同上
帯広市	十勝幌尻岳 (1,846m)		オピリネップ林道	異常なし 通行可	開放中	310	56
中札内村	コイカクシュサツナイ岳 (1,721m)	ヤオロマップ岳 1 8 3 9 峰	－	－	－	46	6
大樹町	ペテガリ岳 (1,736m)		歴舟川支流林道	林道決壊のため11.4km のうち1.5km地点で通行 不可	閉鎖中	回収不能に つき不明	回収不能に つき不明
広尾町	樂古岳 (1,471m)		札樂古林道	林道決壊のため4.5km のうち1.8km地点で通行 不可	閉鎖中	同上	同上